

---

# 世界で二人だけの場所

大城秀一郎

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

世界で一人だけの場所

### 【NZコード】

N1806C

### 【作者名】

大城秀一郎

### 【あらすじ】

平穏な二人の場所だった。一人の男が来るまでは……

## その1（前書き）

後半ファンタジーです。

全部で五話程度なので暇潰しにでもなれば幸いです。

## その1

素敵な月夜だった。

その月の光を二人の男女が互いの顔を見詰めあいながら浴びている。

月光がまるで、その下にいる一人を祝福する為だけに存在しているように、さらさらと降り注いでいた。

この世のどんな照明よりも、それは絶妙な加減で周囲の闇に光を照らしている。

他に、人口の光が一切存在しないから、余計に月明かりが映えて見えるのだろう。

空には月だけではなく、本当に落ちてきそうなほどの大量の星々の輝きが満ちている、思わず手を伸ばせばその一つに触れてしまいそうな錯覚を覚えるほどだ。

”そこ”は、周囲を見渡しても、人工物が視界に一切入らない不思議な空間だった。

人工物だけでなく、他の誰もそこにはいない。  
その二人だけの場所だった。

周囲一面には、人が手を加えて”花壇”として花を育てているのではなく、視界の全てが花壇のような、そんな場所である。

名の有る花だけではなく、雑草も何も区別無く生命として輝き披露し、それぞれの植物が自由に生えており、だが、それでいて荒れ野原には見えない微妙な均衡を保っていた。

春夏秋冬様々な様相をこの場所では見れる事だろう、秋や冬の華が枯れゆく季節でも、決して物悲しいだけではなく人の心の琴線に触れる情景が広がるようと思える。

四方が自然に樹木を利用して壁のように辺りと遮られているが、不自然さはあるで感じられない、そういう壁が有る事により、逆に

この場所が他の場所とは違うと認識出来るようにも思える。

ここがとても都会の空間の一部だと思えなくなる、それが素晴らしかった。

ここでは流れしていく風も、届いてくる音も、時計の針の進みすらも違うようすら思える。

静寂がその空間を占めているが、決して不快な物ではなく、穏やかな微風がその二人を撫でている。

二人は座っている。

座っているのは木で作られた長椅子である。

ちゃんと座れば4～5人が座れるであろう長さのそれに、女が普通に座り、男はその女の太股の上に頭を預け横たわっていた。

二人の表情には至福と呼べる表情が浮かんでいる。

言葉は交わさなくとも、満ち足りた物がある　　そう感じさせる

一人であった。

時折流れてくる華の香が、一体何という名なのかは分からない、しかし鼻腔を擦るその香りは、今の穏やかな二人にはとても心地良い物に思える。

男は幸福だった。

最愛の人と二人。

一人だけで、この空間にいられる、それだけの他の全てを得る事と同等以上の幸福を感じている。

世の中にこれ以上の幸福が有るのだろうかと思える。

有るとしても、それは自分以外の人にとっての幸福だろうと思つた、自分にとつての至上の幸福は今この瞬間、それが一秒でも長く、一分でも長く続く事だった。

「ねえ」

男が、女に声を掛けた。

「なあに」

女は男の声に嬉しそうに答える。

「良いのかな？」

男は漠然とした質問をした。

それは、この場所にいつまでいても良いのかなという質問にも取れるし、また女の足を膝枕にしたままで良いのかな、とも取れる。だが、女はきつぱりと。

「良いのよ」

と、それだけ言った。

声に刺々しさはあるで無く、子供をあやす母親の声にも聞こえた。

「……父さん達はどうして、ああやつて憎しみ合つのかな」

男がまた言った。

「どうしてかしらね」

「こんなに穏やかな時間を、あの人達は知らないんだろうな……、せいぜい何かに金をかける事でしか幸せを感じられない、悲しい人達なんだよ」 男はため息を吐くように言った。

それでも女は笑みを浮かべながら。

「あなたは違うわ」

「君も違うよ」

互いに見詰め合いながら、その視線を絡ませて楽しんでいるように見えた。

その視線の距離が徐々に狭まって行き。

一人のシルエットは重なりあつた。

テスト・シュタインというのがこの男の名前だった。

テストは今年で21歳になる、街の中でも有数の大企業の一人息子で、頭も悪くない。

若い頃から経営についてだと、法律についてだとかの勉強を叩き込まれ、かなり真面目な学生生活を送っていた。

親が金持ちだと、大別すると一種類の子供に分かれる。

一つ、努力を一切放棄し、ただ親の財産を食いつぶすだけのタイプ。

もう一つは、親の財産を増やそうとして、それに見合うだけの努力を怠らないタイプ。

テストは後者であった。

少なくとも彼女と出会つまではである。何しろ勉強に打ち込みすぎて、テスト少年は初恋という物を知らずに成人式を迎えていた。

様々な経験を積んで、数多くの人と接する機会はあったのに、異性関係に関してはまったくの無関心だったのだ。

だが、その成人を祝うパーティーでテストは一人の女性と出会う。出会うと言つても、会話はしていない、ただ遠くから見ただけだつた。

だが、その瞬間、今まで感じた事の無い動悸を覚えた。

一瞬、何かの病気かと思つたほど、それは激しく、そして治まる気配を知らなかつた。

雷に打たれるという表現がこれほどまで合ひつ状況も無い、そう思つた。

それが初恋だと気が付くまでにテストは一週間ほどの時間を有した。

次に出会つたのは、父親と同伴して出席したパーティーだつた。

そういう雰囲気が苦手だつたテストは、やや離れた場所で一人で休憩していた、ふと気が付いたら、あの彼女が立つていたのだ。

確かな運命を感じた。

あの時、どうやっても彼女と再会する事は出来なかつたが、神様はきちんとこうこう機会を作ってくれるのだ、テストは神に感謝していた。

その彼女は、艶やかでそして美しいドレスを着ていた。

一つ一つに金がかかっているが、決してゴテゴテの悪趣味な成金

の服装ではなく、品という物をきちんと身に纏つているのだ、見事な着こなしをしているとテストは思った。

装飾品も最低限付けているが、どれもが控えめである、ただ値段は決して安物ではない。

彼女の年齢はテストと同じくらいだろう、あの会場にいたと言つ事はその可能性が高いとテストは思った。

思わず、ぐびりとテスト青年の喉が鳴つた。

こういう会場にいると言う事は、自分と似た家柄の出身者となる。と言う事は、親に家柄についてとやかく言われる障害が一つ消えた事となる。

これは喜ばしい事だ。

そう思つていたのだが、それは大きな間違いだつた事は後で知る事となる。

テストが勇氣を振り絞り、その彼女に声を掛けようとした瞬間だつた。

突然、パーティー会場の中央から、激しい怒号にも似た声が響いてきたのだ。

どうやら一人の男が言い争いをしているようだつた、そしてその一方の声には聞き覚えがあつた。

テストの父の声だつた。

そして、テストが慌てて走り出すと、その横に立っていた彼女も併走するように走り出していた。

どうしてだろう、とテストは思つた。

ただ野次馬としてその場所に向かうようには見えなかつたし、その表情には何か必死さに似たものを感じたからだ。

だが、ここで声を掛ける訳にも行かず、ただただ急いでテストはその現場に向かつた。

大の大人が言い争いをしている現場は、大抵例外無く醜い。

その光景も決して例から漏れる事は無く、みつともない物だつた。

テストは父がそんな顔と口調で人と言い争いをしているのを初めて見た。

相手の顔は見覚えがあり、記憶を探るとすぐに思い出した。

この街で有数の大企業であり、そして父の商売敵の会社の社長だ。常々、父はこの社長の事を気に入らないと言つていたのをテストは思い出していた、やり方から何から何まで全てが気に入らないときつと今日の服のセンスすらも父は許容しないのだろうと思つた。どちらも互いを卑怯者とか、品が無いとか、子供の口喧嘩程度の罵り合いを繰り広げている。

パーティーはすっかり白けている。

慌ててテストは父親に。

「父さん！ こういう場所で、恥ずかしいだろ？！」

と言つた後で、父にだけ聞こえる声で。

「こういう時は、わざと自分から折れて大人の余裕を見せた方が得だよ」

と囁いた。

テスト自身はそういう駆け引きなどは好きではない、しかし激昂した父を治めるには最良の手だと思えた。

テストの父は徹底した貿利主義者で、得とか損とかの言葉に敏感だつたからだ。

一方の口喧嘩の相手も、何とテストが惚れた彼女が必死に宥めている所だった。

?マークがテストの頭上に幾つも浮かんだ。

一体どういう関係なんだろうか。

そう思つたテストの疑問に、彼女はすぐに答えた。

「お父様！ 他の皆様に迷惑がかかります！」

思えば、テストは初めてその時彼女の声を耳にしたのだ。

その声の甘美さにうつとりする間も無く、テストはその言葉の意味を反芻していた。

お父様、お父様、お父様、お父様……

年齢とか、家柄とか、そういう次元ではない障害が確固たる物としてテストの前に立ちはだかった瞬間だった。

### 秘密の花園。

テストはこの場所にそういう名をつけていた。

二人だけの場所。

一人以外は誰も入れない場所。

内密に会うには最適の場所と、馴染みの庭師に勧められたのだ。実際このような奇跡のような場所が存在するとは、言われるまで気が付かなかつたが、それ以来テストはここで彼女と密会と続いている。

「何を笑っているの？」

彼女が問う。

「初めて会つた時の事を思い出していたのさ、あの時はもう絶望的だと思ったよ」

それからこんな関係になるまで色々有つた。

思い出すと一瞬のようだが、時間にしてみると長い時間の話だ。だが、問題なのは過去ではない。

今なのだ。

今この一瞬の全て、この平穏な時間こそが幸福なのだ。

誰にも邪魔をさせるつもりは無かつた。

もし、誰かがこれを邪魔するといふのならば

「よう、邪魔するぜ。『二人』

突然、この幸福の空間に無粋な男の声が響き、テストは思わず上半身を起こし、そちらに視線を向けた。



「どちら様ですか」「

テスト・シユタイン青年は、必死に平静を保ちながら、その謎の侵入者に問いかけた。

本当ならば、激昂して「誰だ！」と声を荒げて問い合わせたい所だつたが、それを理性で必死に押さえていた。

穏やかで平穏な極めてプライベートな場所に、それも恋人と楽しんでいるところに、突然見知らぬ男が入ってきたのだ、テストが怒るのも無理は無い。

この場所が公共の場所だとしたら、いくら恋人同士であろうと他人に迷惑をかける行為をしていれば邪魔されても仕方が無いかもしれないが、ここはそういう場所でもないのだ。

「まあ、そうカツカスんなつて」

男は軽い口調でそう言った。

どこか漂々（ひょうひょう）とした雰囲気で、危険な香りはしないし、暴力的な物も感じさせない、たまたま迷い込んできただけのようにも見える。

だが、そんな訳が無かつた。

この場所は、誰かが迷い込むような場所には造っていない、入る為にはそれなりの手順を踏まなくてはいけない、テストは庭師にそう言われた、だからどういう監視の目もここには届かない。

テストも彼女もどちらも大富豪の子である故に、常にボディーガードが傍についている、だから密会をするにもわざわざどこかの山奥に行く訳にも行かず、また、互いにそんなに時間的に余裕は無い為に、途方に暮れていた所、この場所を教えてもらつたのだ。

時間的につつでもここに来れて、そして誰も入れない場所。

夢のような場所だ。

テストはその庭師に何か礼をと思つたのだが、何もいらない、ただ幸せにと言われたのだ。

不審な話といえばそうかもしれない、この世に無料の物など無いのだから。

だが、テストはこの話に飛びついた、飛びつくしかなかつた。

二人で過ごす快適な時間は、どのような貴金属よりも、どのような美食よりも、今のテストには必要不可欠なものだつたからだ。

それなのに、今、こうしてこの時間を邪魔する者が現れた。

テストは平静な表情でありながら、その眼は千年来の仇敵に向ける視線で男を睨みつけていた。

「ここは極めて私的な場所です……、どうこいつ用件であるひとといふでは伺いかねますが」

そう言いながら、テストは男に改めて視線を送つた。

服装はきつちりとスーツを着こなしている、ブランドまでは分からぬが安っぽい作りの服では無いように見える。

長身で、贅肉は見当たらない、すらりと伸びた四肢でありながら、ひょい長いという印象を与えない。

この格好のままで、世界のどのパーティー会場だろうと、大抵は違和感を与えないだろう。

顔立ちも鼻梁はすつきりと通り、眼は男特有の魅力のある眼をしている、そういう部分では不審者とは思えない雰囲気ではある。

だが、髪型はまるで違う。

肩よりやや長めの髪に、まるで水分をタップリ含んだままベッドに入り、そしてそのまま翌日を迎えたように、ひどい寝癖が付いていた。

一部分がはねているのではなく、髪全体がぼさぼさに髪が束になり、それぞれに意思を持つたように別の方向に向いていた。

一瞬そういう髪型なのか？と思つてしまつが、意図的というてはあまりにも独創的に爆発した髪型だった。

それにしてもどういう用件でここにこの男は現れたのだろうか？

「いや、それにしても素晴らしい場所だね、ここは」

テストが不審な視線を送っているにもかかわらず、平然と男はそう言つてのけた。

まるで親しい友達の家に遊びに来たような口調であるが、当然テストも横の彼女も彼を招いた覚えなど無い。

「あなた……、私が彼女の父に言われてきたのですか？」

テストは、声に僅かの震えを感じながら、そう言つた。  
もしもこの推測が当つているのならば終わりだ。

二人の関係も、この場所も知られてしまった、それはどういう意味なのか。

考えるまでも無い。

足元の地面が崩れ落ちるような絶望を、テストは予感していた。

「ま、そういう事になるかな」

その声を聞いた途端、テストの顔がはつきりと分かるように青褪あおさまめていた。

隣に座っている彼女も、テストの服の裾をぎゅっと握り締めた。  
終わりだ。

全てが終わりだ。

あるいは、手持ちの金だけを持つてどこかに一人で逃げる事は出来るかもしれない、駆け落ちという奴だ。

だが、正直な所も、テストも彼女も温室育ちであり、外で生き抜く術をまるで知らない。

仮に生きていけたとしても、互いの親の財力を持つてしての捜査網を搔い潜つて生きていける訳がない。

いずれは捕まってしまうだろう。

テストが絶望的な将来を思い描いたと同時に、また男が声を発した。

「別にあんた達をとつ捕まえに来た訳じやない、安心しなよ」

優しい口調でそう言つた。

だが、それだと何をしにこの男は来たといつのだらうか。  
「では、どのような用件ですか？」

「テストが問うと、男ははつきりとした口調でいつ言った。

「あなたを”助け”に来たのさ」

その言葉の意味はテストには理解出来なかつた。

助ける？

何から？

誰から？

「ijiは、居心地の良い場所だねえ……、しかし、こんな場所、一  
体どこにあるつていうんだろうね」

男は意味不明の事を言い出した。

「なつ、何を言つてゐる？」

男の言葉は意味が分からぬ。

だが、意味が分からぬいくせに、テストはその言葉が何か重大な  
事実を告げようとしているような、そんな不安を感じていた。

開けてはいけない扉を開こうとしているような そんな予感が  
する。

狼狽するテストをよそに男は言葉を続けた。

「都会の真ん中？ 夜空に星が見えるのに？ しかも外から一切の  
音が入らない…… そんな場所が本当に有るのかね？」

「あなたはどうかしているのですか？ 実際にここに有るじゃない  
ですか？」

テストは、平静を努めながらさう言つたが、声が隠しよつも無く  
震えていた。

「実際に、実際にね。それじゃ聞くけどね、テストさん」

男は一旦言葉を切り、真つ直ぐにテストを見詰めた。  
テストもその視線を真つ向から受けて立つた。

テストの横で、女は怯えるようにテストにしがみ付いていた。

「あんた、最後にメシを食ったのはいつだ？」

唐突な質問だった。

テストが言葉を挟む前に、男は更に言葉を続けた。

『最後に寝たのはいつだ？』

『最後に風呂に入ったのはいつだ？』

『最後にクソをしたのはいつだ？』

『最後にクソをしたのはいつだ？』

「良く考えてみな、よおーく、な」

男は、そう言つと、テストの眼を真っ直ぐに見詰めていた。何もかも見通すような眼だった。

そしてテストは理解していた。

この場所に来て、夢のような時間をくつろいで過ごしていたが、それが一体どれほどの時間だったのか、それがまるで思い出せない事を。

この場所にしても確かにそうだ、男の言つ通り、こんな奇跡のような場所が存在するのか、仮に存在していたとして、その場所を他人が無償で自分に使わせてくれるだろうか。

答えはNOだ。

では、ここは、一体……

テストのその疑問を見透かしたように、男は口を開いた。

「……がどこか分からぬって顔しているぜ、思い出しなよ、あんたの最も身近な場所だぜ？」

男は、意味有り気な笑みを浮かべながら、そう言つた。

「え……」

テストは、呆然としている。

横に座っている女も、その様子をどこか虚ろな視線で眺めている。

「思い出せないよ、自分で心に鍵をかけちまつたんだからな、自分がだけの力じゃあ思い出せないさ。だから俺が思い出させてやるよ」

男は、そう言いながら、二人に歩み寄りながら、懐に右手を突っ込んだ。

あまりにもそれが無造作すぎて、テストも横の彼女もまるで「反応が出来なかつた、男が足を止めて、右手を懐から取り出した時、そこには銃が握られていた。

大振りの銃だ。

銃の扱いに慣れていなければ、いや、慣れていたとしても片手で扱うのは至難に思えるほどの大きさである、その破壊力は想像を絶するだらう、人の体など、その銃の破壊力の前には紙切れほどの存在に過ぎない。

口径が小さい銃ならば、その弾丸が体内に残つてしまふ事で命の危険があるが、これほどの口径ならば、そういう心配はあるで要らない、あっさりと体が千切れてしまうからだ。

それを眼前に見ると、非現実的すぎて、自分が死と相対しているとは思い難いが、本能なのか、テストの呼吸は荒くなり、明らかに脈拍が上昇していた。

「な、な、何を」

テストが、言葉を発する前に、その銃口は外しようが無いほど真っ直ぐにテストに向けられていた。

二人の間の距離は、7mを切つていて、それなりの腕前の人間ならば、体のどこを狙つても良いという条件付であれば外さない距離である。

「動くなよ」

男はそう呴いたが、そう言われなくともテストは動けなかつただろづ。

何か圧倒的な物が自分の体に圧し掛かっているような、そんな圧力をテストは感じていた。

言葉さえ発する事が出来なかつた。

横の恋人に『逃げろ!』と言つ事すらも叶わない、もし仮にそう叫べたとしても状況はどういう変化も起こさないだろうが。

男の指が、引金にかかり、あっさりと言つほど簡単にそれは引かれていた。

テストは思わず身を竦めたが、激しい銃声は響かなかつた。

ただ、その銃口から、何か淡い青色をした球体が放たれて、それがテストの体に溶け込むように消えていつただけだった。

「？」

『冗談だつたのか？

銃に見せかけた、ただのシャボン玉を作る玩具？

そう思つた瞬間に、テストの脳が激しく揺さぶられていた。

蓋をしていた記憶を、思いつきりこじ開けられる感触を味わつていた。

怖かつた。

見たくなかった。

必死でそれを押さえ込もうとしたが、ダムの決壊を素手で抑えることが出来ないよう、それは止め処無く溢れてきた。

テストの脳裏に映像が次から次へと浮かび上がっていく。

それと同時にテストの両眼から涙がぽろぽろと流れしていく。

口からは幼児のような、意味不明の言葉が漏れている。

テストは見ていた。

この場所の事も、何もかも、テストは記憶を思い起させられていた。

テストは、彼女と恋仲になつたのだ。

だが、そこに至るまではかなりの月日を要した。

あのパーティー会場の一件で、互いの関係を理解しながらも、テストはその後も諦める事無く彼女を想つていた、そして日々恋焦が

れ、あらゆるツテや口ネや財力を利用して、彼女との関係を築こうとした。

しかし相手も自分と同等の財力を持つ令嬢であり、それを調べると言つ事はかなり慎重にならざるをえなかつた。

その後、テストは色々と試行錯誤を繰り返し、ようやく連絡を取り合うようになるまでにテストはかなりの時間を費やす事となつたのだ。

だが、ようやく知り合いとなり、何氣ない会話をすると、これほどまでに気が合つのかと思えるほどに惹かれていた。

外見だけではなく、内面にもテストは激しく彼女に惹かれたのだ。そして何度かのデートの後に、ついにテストが想いを打ち明けると、彼女はテストの想いを受け止めてくれたのだった。

そこまでは良かつた。

ある時を境にテストは、急に彼女と会えなくなつた。

携帯電話も通じない。

家に電話を掛ける訳には行かない。

だから、彼女が現れそうな場所に顔を出したのだが、どこにも彼女の姿は無かつた。  
 彼女はまだ学生であり、学校で待つていれば会えるかとも思ったのだが、学校も休んでいるといつ。どう言つ事なのか。

テストは混乱した。

その状況が2週間も続いたのだから無理も無い。

嫌われてしまつたのならば仕方が無い、だがそれを本人の口から聞きたかった、いや、嫌われている訳が無い、何か理由が有るはずだ、そういう感情が幾つも積み重なり、テストはとうとう彼女の家に忍び込む事にしたのだった。

そこでテストは見てしまつたのだ。

そして彼女もテストを見たのだ。

あの顔を忘れる事が出来ない。

忘れる訳がない。

彼女は重い病で自宅療養していたのだ。

その病気は、完治する事は出来るが治療にかなりの時間を要する病気で、それを気にして彼女はテストの一切告げずに自宅で療養していたのだった。

その表情は、かつての彼女の顔見知り程度の人間だつたら本人と気づけぬほどやつれていた、だがテストははつきりと本人だと分かった。

眼を見れば分かる。

忍び込み、窓から彼女の顔を直視したのだ。

最愛の人と呼んでいる相手ならば、例えどのような変装をしても分かるとテストは思っていたが、さすがに一瞬は本人だと分からなかつた。

それほどの変貌であつた。

かつて、恋愛関係に疎いテストが、一瞬で引き込まれた美貌はそこには存在していなかつた。

テストはそれが彼女だと分かつた瞬間に、思わず声を発してしまつていた。

テストの口から漏れたのは、久しぶりに最愛の人に会えた喜びの声ではなかつた。

それは悲鳴だつた。

テストは、その瞬間に恐ろしくなり、彼女に背を向けて走り出してしまつていたのだった。

そのテストの背に彼女の声が届いたのだが、何という意味を持った声だつたのか、それはテストには分からなかつた。



テスト・シュタインは、呆然とした表情で男を見詰めていた。その横に座る女は、何も言葉を発さずただ一人のやり取りに視線を向けていた。

この場所は、現実ではない。

それをテストは思い出していた。

紛れも無い事実だ、現にこうして周りの風景をよくよく見て見ると、どこか幻想的過ぎる、漂つてくる華の香りすらも、今では作り物めいて感じてしまう、それにこの男の言つた通り時間の感覚はとつぐの昔に無くなっている、現実では一体どれだけの時間が経過しているのか見当も付かない。

男の言葉を信じるならば、男は”ここ”からテストを助ける為にきたといつ。

「思い出したかい？」

男の言葉に、テストは。

「ああ……、あ、ああ……」

返事なのが、それとも嗚咽なのか、どちらともつかない声がテストの口から漏れていた。

「あなたは、真面目な男なんだよ。クソが付くほどな……」

男は口は悪いが、ただ相手をけなすだけではない口調でやう言ひついた。

どこか思いやりも籠つてているように聞こえる。

「自分自身が彼女を傷つけたと思い、そして自分の精神の殻に閉じこもっちまつたんだ、確かにここは楽園だろうぞ、最愛の人と永遠の時、それも邪魔をされない至福の空間だ、ただな、このままじゃあんた死ぬぜ……、もうかなり衰弱しちまつてゐ、そろそろ戻らないと手遅れになる」

「死にますか……」

「”外”じゃもつ一週間以上経っているんだ、点滴でいくら栄養は補給できても、限界が有る、人の体は健康ならば活動が前提で作られていくからな、何もしないというそれだけで激しく衰弱する……」

「……一つ聞きたいのですが」

「なんだい？」

「あなたは、どうやってここへ？　ここが私の意識の中だといふのならば、どうやって？」

テストは混乱しながらも、今一番最初に浮かんだ疑問を尋ねた。  
「俺はそういう職業なものでね、そうやって何度も精神病患者とかを治療している……まあ公認じゃないし、国家資格も無い、インチキやペテンも多いが、中には本物もいる、その数少ない本物が俺さ」

男は、右手に銃を握りながら、魅力溢れる笑みを浮かべていた。ただの微笑でありながら、ただの美男子が浮かべるそれと同等以上の人を惹きつける物が込められていた、異性だけでなく同性をも引き込む魅力である。

だが、テストは俯いたまま。

「帰りたくない……」

と小さく呟いた。

「あ？」

「帰れるもんか！　どんな顔して彼女に会えれば良いっていうんだ！病床の彼女を見て逃げ出した、この最低な男に生きる資格なんて有る訳無いだろう！」

そう叫ぶと同時に、辺りの景色が一変した。

理想的な花畠のような場所だったのが、男を中心としてまるで地獄絵図のような風景へ変わっていた。

花咲き乱れていた地面には、禍々しい原色の蛇がいやらしくその身をうねらせている、その数は一匹二匹ではない、地面全てが蛇で

埋め尽くされているのだった。

漂つっていた華の香りが、何かの腐った臭いのように、吸い込むとそれだけで肺が腐り落ちてしまうような、そんな臭気が満ちている。空に満ちていた星々も姿を消し、その全ては邪悪な意思を持つ悪魔のような瞳と変貌している。

変化をしていないのは、テストと、男と、彼女と、そして彼女の座る長椅子だけだった。

「それが本心なのかい？」

「ここで罪を悔い改めて、そしてそのまま命を絶つ 相応しい末路じゃないか」

その言葉には強烈な覚悟が秘められているようだった。

生半可な覚悟ではそのような言葉は出ないだろ?と思える。

「嘘つけよ」

だが、男は、ため息をつきながら、やれやれといった態度でテストの覚悟をあっさりと否定していた。

「何だと!」

「あなたは、ただ怖がっているだけだ、自分が心底嫌われるのを、な。それだけならまだ可愛いもんだが、こんな場所に逃げ込んで、妄想の恋人と擬似恋愛を楽しんでやがる……、罪を悔い改める? ならここはもう少し別の形をしているはずだぜ、あなたはただ安住の地を求めてここに逃げ込んだだけだ、格好つけるんじゃないよ」「激しい言葉だった。

それ自体が凶器となり、テストの全身を切り刻むような、そんな言葉であった。

テストは全身を震わせている。

それが、怒りの為なのか、動搖なのか、あるいは悲しみなのか、恐怖なのか、それは本人にも分からぬのだろう。

ただ震えている。

テストは、かつ、と眼を見開き、男に眼光を浴びせていた。眼が血走っていた。

現実世界では中々見られない光景である、テストの両眼は、眼の淵を破り、顔の半分ほどの大きさにまで達している、そしてそれは両眼共に肥大し続けている。

中央の黒目がまだちゃんと残っているのが不気味であった。

眼だけではない、腕も足も、元の形状が分からぬほどに肥大していく、ボディビルダーが全身に力を入れているのとは異質すぎる、あれはいくら凄い筋肉量だとしても、まだ人間の骨格の範疇を超えてしない、だが今の目の前のテストの肉体は、そんな肉体の常識という縛りなどまるで意に介さないようだつた。

もう、顔も肉体も原型を留めていなかつた。

恐らく、テストが子供時代から今に至るまでに眼にしてきた、全ての強い物、怖い物、そういう物が結集しているのがこれなのだろう。

酷く歪な、幼稚園児くらいの子供が造り上げた粘土細工を元に、精巧に造られた生々しい肉のオブジェのように見える。

恋人がそのような怪物に変貌していく横で、美しい彼女が無表情にただ長椅子に座っている光景は異様であつた。

「お……、おづあえに、何が分かる……」

テストはそう叫んだ。

だが、言葉は正確に発声出来ていない。

テストの体の変貌は止まらない、ここがテストの意識の中だからだろうか、肉体のあちこちが怪物化し、今にも男に襲いかかろうとしているように見える。

男は、テストを救いに来たと言つたが、このような場合はどうするつもりなのだろうか。

本人が帰りたくないと言つていて、それを無理に連れて行くというのは現実でもかなり難しい、それに加えてこの場所 자체がテストの精神の中だとするのならば、あらゆる想像がテストには可能であり、ほとんど神のような存在と言えるのではないだろうか。

それに抗う術があるのか？

倒す事も難しいかもしない状況なのに、救うという行為が果たして可能かどうか、限りなく不可能に近いように思える。

だが、男はそんな心配をまるでしていないのか、銃を怪物と化したテストに向けながら、不敵に笑い。

「何が分かるかって？ 知るかよ、ガキが……、自慰行為も結構だがよ、そういうのはきっと現実の女に決別してからするもんだぜ」

そう言い放っていた。

その瞬間に、テストの右腕が振り下ろされていた。

腕を振り下ろすという感覚とはまるでスケールの違う攻撃だった、熊が前肢を振り下ろすのでも人の肉体は耐えられないが、今のテストの攻撃は上空に吊り上げた象を落下させるような攻撃であつた。

精神世界でも、その圧倒的な重量の攻撃は、地面を搖さぶつていた。

男は、そのテストの攻撃を見事に搔い潜つていた。

だが、足場は悪い、何しろ地面を多い尽くすほど蛇が敷き詰められているからだ。

しかし、これらはそれほど警戒しなくても良い、と男は考えている、これらはテストの敵意の現れなだけで、それぞれが猛毒を持っているような代物ではないと理解している。

男は、銃口を怪物と化したテストに向けると、躊躇う事無く引金を引いていた。

三度引いた。

先ほどはシャボン玉のような物が放たれたのだが、今度は普通の銃弾のような物が放たれていた。

人の精神の中では、そういう武器の設定も好きに変えられるのかもしれない。

だが、その攻撃は今のテストの肉体の前には、その程度の攻撃はあまりにも無力であった。

着弾した部分は激しく肉が抉れるのだが、次の瞬間には瞬時に再生してしまうのだ。

その後も何度も男が軽やかにテストの攻撃を搔い潜り、銃弾を浴びせるのだが、それが効果を表しているようには見えなかつた。

水鉄砲でガソリンが原因の火災を消火しようとしているような、そんな徒労に思える。

いくら男がその攻撃を避け続けられたとしても、攻撃する手段が無ければいはずはどうなるか、結果は見えている。

弾は尽きないのか、何発と無く撃ち続けていたが、さすがに同じような攻撃を繰り返せば、隙が出来てしまつ、それをテストは見逃さなかつた。

「ちい！」

それが足だつたのか手だつたのか、それすら分からぬが、男に向かつてテストの体の一部が、鞭のように襲い掛かっていた。

鞭、と言つても、それは決して細くは無い、何本にも束ねた棍棒がしなつて襲い掛かってきたような物だ。

それを男はまともに喰らつて、吹つ飛ばされていた。

精神世界だらうと、この場所ではつきりとしたダメージを食らつと、現実世界でもダメージを負う場合が有る。

男のような熟練者になれば、逆にこの空間に”馴染み”すぎて、ダメージが多い場合すらあるのだ。

そして熟練者だらうと素人だらうと、この空間での共通の事は、ここでの死は現実世界での死でも有ると言う事だつた。

圧倒的な質量の怪物と化したテストが、倒れて体中に蛇をまきつけた状態の男に襲いかかろうとしていた。

だが、男の眼はまだ諦めていない。

その右手にはまだしっかりと銃が握り締められていた。

「お、あえ、じゃま……、か、えれ……。そつ、として……くれ」

テストは、人の声ではない何か別の言葉で、そう言つていた、意

味 자체는 남에게도分かる。

だが、あまりにも酷い雜音の凝集のようで、現実の音だとしたら誰もその意味を捉えられなかつただろう、精神世界だからその意味が男には届いたのだ。

誰かを呪い殺す為の呪詛のようにすら聞こえる声だつた。

「帰れつて？ それじや商売上がつたりでね……、心配しなくともすぐに済む……、これで終わるさ」

男は、立ち上がらずに、上半身だけ起こした形でテストに銃口を向けていた。

「この一発で終わりにする」

男は不敵にそう宣言していた。

## その4 完

異様な光景がそこに広がっていた。

地面上に蛇が敷き詰められ、空には悪魔の瞳のような物が多数存在し、樹は枯れながら、毒素を放つてはいるような、そんな場所。

そこで象を五匹ほど無茶苦茶にくつ付けて、その皮膚を剥がしたような怪物が存在し、それとその怪物の量感に対しても豆鉄砲ほど威力しか持たない銃を持つ男が相対している。

それも男は、本当か嘘か次の一撃で終わらせると発言している。  
「来な……」

男の声に反応したのか、怪物化したテストは真っ直ぐに男に向かつて飛び掛っていた。

物凄い速度であった。

技術ではなく、ただの体当たりだとしても、それを受けて絶命を免れる生命体など地球上には存在しないのではないかと思えるほどの勢いである。

それを目の当たりにしながら、それでも男は微動だにせずに、ただ銃を構えている。

それほどの威力がこの銃には込められているというのだろうか。考えられる事は有る。

ここが精神世界ならば、その威力はあくまで想像力。

一発のみに意識を集中させれば、このような商売を長く続けていけるこの男の銃は想像を絶する威力を持つのかもしれない。

そうすると、先ほどまでの威力はあくまで小手調べか、相手を油断させる為だけの布石だったという事になる。

怪物と男の距離は一気に縮まっていく。

時速100kmほどで、自分に向かつて鯨が突っ込んでくる状況を想像してもらえば、この時の男の心境を多少なりとも理解でき

るかもしれない。

それほどの圧力を前に、男は汗一つ浮かべていなかつた。

この世界では、自分自身の意志力が顕著に表に出てしまつ、いくら平静を保ついても、本当に焦つていればそこに汗が出現してしまふのだ、それが見えないと言ひ事は、本当に男が極めて冷静と言つ事なのだ。

テスト青年が、先ほどまで怒りを胸に秘めても表情に出なかつたのは、あくまでこの空間の主導権を彼が握つていたからであり、その場所を間借りしている身分の男には、そういう偽装は出来ない。

唐突に、男は引金を引いていた。

銃口から、勢い良く放たれた弾丸は真つ直ぐにテストに向かいだが。

怪物化したテストは、その男の渾身の一撃を避けていた。

それだけの巨大な肉体を有しながら、その俊敏さは小動物並みであつた。

テストはしつかりと聞いていたのだ、そして冷静に判断していたのだ。

最後の一撃と言つた言葉、それが嘘か本当かは別として、わざわざ喰らう必要はまったく無い。

避けてしまえば良いのだ。

銃弾を避けるという、本来ならば至難の技も、この空間では自分にとつて可能な行動の一つに過ぎないと、テストは理解していたのだ。

「ざんねん」

テストが、その歪な肉体と化した体の一部に元の顔を出現させ、そう言つていた。

だが、男の口元には醜悪な笑みが浮かんでいた。

「残念なのはそっちらさ……、あーあ、避けちまつて……、可哀想に

な

男は意味深にそう言った。

テストが、視線を男の銃口の先に向けた瞬間、それに気が付いていた。

弾丸は的を捕らえていたのだ。

男が狙っていたのは最初から、テストではなかつた。

テストの心の拠り所。

テストの最愛の人。

ベンチに座っていた恋人の胸に巨大な穴が開いてしまつていた。胸に穴が開いているというのに、まだ顔には笑みが残つてゐるのが異常であった。

次の瞬間、空間を搖るがすような絶叫が響いていた。

ありとあらゆる場所から放たれた悲鳴である。

断末魔の叫び、あらゆる人間の叫びが空間の全てから放たれてい るような、そんな吐き氣を催す声があちこちから漏れていた。

その瞬間、歪に肥大していたテストの肉体が、まるで一枚ずつ剥がされていくように、脱皮していくように縮んでいった。

この空間では精神力こそが行動力となる、相手を排除しようとす る意識が凝集して怪物化したのならば、その精神力の根源となる存在を破壊された事により、一気にその力を失つてしまつ事もまた有るのだ。

瞬く間に、テストの肉体は元の人のサイズにまで戻つていた。

だが、その眼には絶望とは違う色も同時に浮かんでいた。

足元の蛇も消失し、そこには地面ではなく真っ白な無地が広がつ ていた、空も白く塗り潰されたようになり、この場所で明確な形を 保つてゐるのはテストと男だけになつた。

「さあ、帰るぜ？ ここにいる必要はもう

男がそこまで言つた時だつた。

テストは、一気に男に飛びかかると、右手に出現させたナイフで その左胸を貫いていたのだつた。

「ぐつ！」

男が苦痛の呻き声を漏らした。

「殺してやる……、俺の、俺の彼女、恋人をおおおおおおおお  
明らかにそのナイフの刃は、根元まで突き刺さり、絶命に至る傷  
を男に与えていた。

「真実の愛だ！ 永遠の愛なんだ！ 邪魔をするな！」

だが。

男は、急にバネ仕掛けの人形のようごと、左手でテストの右手を掴  
んでいた。

「なに！？」

凄い力だった。

骨が軋むほどの力が込められている。

テストが右手に渾身の力を込めて引き離そうとしたが、今度は男  
の右手がテストの左手を掴んでいた。

まるで離れない。

それだけではなかつた。

カシャン、カシャンという機械的な音が響いたと同時に、今度は  
男の体の至る所から金属の針のようなものが飛び出て、それが全て  
テストの体に突き刺さり、絡みつき、テストは視線すらも動かせな  
いほどまでに体を固定されていた。

一体これは

「やつと、捕らえた……。手間かけさせやがって」

胸を貫かれているはずの男が、そう言つた、その声には感情が籠  
つてゐるのだが、先ほどとはまるで違ひ機械的な音声に聞こえた。

「お前は……、何なんだ！？」

「俺は疑似餌さ、あんたを捕まえる為の、な」

それだけ耳にした瞬間、テストの体は男と一緒に一気に引っ張り  
あげられていた、それは上に跳んでいくという感触とも、地面に沈  
んでいくという感触ともまるで違う異様な感覚であった。

テストの意識はそこで消失した。

とある病院の、一般の人間は入る事が出来ない区画の特別入院室。ここには、最高の治療と同時に、完全にプライバシーが護られる場所であった。

もちろん、一つ一つの部屋は完全な個室である。

その中で、今、昏睡状態だった患者が眼を覚まそうとしていた。その部屋にいるのは6名だった。

一人は患者本人。

もう一人は患者の父親である、心労が重なっているのかその顔には色濃く疲労が浮かんでいる。

他には、眼鏡をかけた中年の医者。

貴禄のある看護婦。

スーツを着た、むさくるしい頭をした30代くらいの男。

そして車椅子に座つて、両目を開いてはいるのだが、どこも見ていないような視線を向け、瞬きを一度もしない若い男。

その6名であった。

昏睡状態の患者は、現代医療では治しようが無く、患者の父親が藁にもすがる思いで呼んだのが、スーツの男である。

その道では有名人の、精神心靈医療術者であつた。

一切の機器をしようせずに、人の頭に手を当て、そしてその人の精神的な悩みを解決したり、植物状態の患者の意識を取り戻したりする、そういう能力を持つてているのがこの男である。

「せつ、先生……」

もう、三時間以上スーツの男は、何も言わずに患者の頭に手を当てたまま眼を閉じていたのだ。

それが今、眼を開いた以上、何かが起じると患者の父親は期待しているのだ。

「施術は成功した」

スーツの男はそう言った。

僅かな疲労を窺わせる口調だった。

「本当ですか！？」

「ええ、じきに眼を覚ますだらう、少々手間取つたが、まあ問題は無い、後遺症も残らないよ」

「ありがとうございます……」

父親は、涙を浮かべてそう言った。

医者も看護婦も、信じられないと言つた表情を浮かべているが、患者にセットしている脳波計が如実にその変化を表している。

患者がベッドでうつすらと瞳を開けると、父親は歓喜の叫びにも似た声を発していった、それと同時にすぐに医者にたしなめられ、声を潜めていた。

「う……、う、ここは……」

自分がどこにいるのか、それが分からぬようだつた。

「起きたかい、クレア」

「お父様？　え、ここは？　病院……？」

患者、クレア・バーフィールドは一週間ぶりにその眼を開いたのだった。

起きたばかりのクレアは、1週間も寝たきりだった為、筋肉が弱り、有る程度の軽いリハビリを行わなければならず、医者と看護婦を残して、残りの三人、父親とスーツの男、そして車椅子の男をスーツの男が押して部屋を出た。

「今回はツイでなかつたようで」

「まったくです……、こんな事になるとは夢にも思つていませんでした」

「この男……結局、お嬢さんと面識は無かつたんですかね？」

「いや、有つたのかもしだせんが、一方的なものだつたのでしょ  
う、優秀な探偵を雇い調べましたが、少なくとも電話の通話記録も  
クレアの友人の話でも、あの男に関しては一切出てきませんでした、  
たまたま同じ病院で似たような意識不明患者がいると聞き、それで  
何か関連があるかと思い調べてみたのです」

「この男は一体どういう素性でした?」

「調べた所、娘の出席したパーティーでボーカルをしていた経歴は有  
りました、考えられる接点は唯一そこだけです、パーティーで最後  
まで一緒にいた友人の記憶にも残っていませんでした、クレアはこ  
れまで女子高と女子大に通っていました、だから同級生と言う事も  
ありえない」

「それでは、一方的な片思いの結末か……、救われない話だ」

「ええ

「お嬢さんの意識の中に、自分の意識を放り込んで、そこに住むよ  
うにする……。呪術では似たような物が有るが、それは相手を操ろ  
うという意思が存在する、今回はただ住むだけでそれ以上を望まな  
かつた、だから余計に性質が悪い、精神の悪性腫瘍みたいなもんで、  
宿主であるお嬢さんには決して良い物じやない」

「時折不自然な態度をとるようになつて、それから言動がおかしく  
なつたのです、そしてついに意識を失つてしましました……、脳を  
調べても異常は見つからず、それで先生にお願いしたという次第で  
す」

「彼は テスト青年は、もしかしたら俺以上の素質を秘めていた  
かもしけない……、それなりの修行を積めばね。人を想う、それも  
ほとんど会話もろくにした事が無い相手を妄想だけで愛し、このよ  
うな高等技術を行えるというのはちょっと常軌を逸している、世が  
世なら、それなりに名を残せたかもしねない」

「先生が、クレアから抜き取つたという彼の精神は元に戻せないの  
ですか?」

「それは無理だろう、今こうして車椅子に乗せてはいるが、今のこ

いつは脳死よりも遙かに死に近い存在。恐らくこいつはお嬢さんを想つあまり、恋焦がれるあまり、お嬢さんに意識を送り過ぎたんだ、それは比喩ではなく本当に魂を削る重労働だからね、放つておけばそのままお嬢さんの中で生き続ける事になる、生命体としては仮死状態だとしても、意識の中では永遠に生きているのと同じ事だ

「ゾツとしない話ですね」

「結局彼は、彼女の意識に入つていながら、まつたくその精神を冒していくなかつた、例えるならば人の家に忍び込んで、その物を一切荒らさずに自分の部屋を作つてそこで楽しんでいたようなもんで、だからそれをそのまま引っ張り出せばそれで済む、もしもお嬢さんの精神に侵食しているよつならもう少し時間が掛かつていたかもしだれないな」

「先生には本当にお世話をになりました」

「中々神経をすり減らす作業だつたけどね、何しろあいつを引つペがす為には、あいつの欠片も残さないよつに気を付けなければならない、だから最初はあいつを”助ける”為に来たと嘘をつけたけれど、それも通用しなかつたから、仕方なくあいつの心のシンボルを破壊して、心の中の感情を一点集中させたんだ、つまり俺に対する殺意のみにね、それで、俺を攻撃した所を掴んで取り出したのさ

「

「今後もし、同じような事が起こつたらお願ひしますね

「その時は、また」

(永遠の愛、真実の愛……か。妄想の中でも、それを得られたなら、こいつも満足なのかもしれないな……。現実じやどうにも手に入れられないものを精神世界で補う、それも決して悪い物じやない、度が過ぎなければな )

完

#### その4 完（後書き）

ほとんど短編です。

意味不明な部分が多数有ると思いますが、あえて解説させていただ  
くと。

途中のテスト青年の一人の出会い以降の回想はほとんど全てが妄想  
であり、そして自分が精神の殻に閉じこもった理由すらも妄想であ  
りました。

というよりも、男が撃つた最初の銃弾が、テストの意識に偽の記憶  
を打ち込む作用があり、それを元に男はテストを騙すように作業を  
続けたのです。

つて無粋ですね、この解説は。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1806c/>

世界で二人だけの場所

2010年10月8日15時14分発行